

Title	紀要の表紙が語る「へき研」昭和20年代の記憶
Author(s)	
Citation	へき地教育研究, 58
Issue Date	2003-12
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/1270">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/1270</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

## 紀要の表紙が語る「へき研」～昭和20年代の記憶～

へき研の研究紀要『へき地教育研究』は、現在、第58号（平成15年）をかぞえています。昭和28年創刊の第1号を手にすると、誌名はもとより発行者まで異なっています

第1号『教育研究』は総合教育研究所が発行したもので、「僻地教育問題」を特集しています。巻頭論文は初代学長田所哲太郎の「僻地教育と孤独思想」でした。第2号は発行者が僻地教育研究所に変わり、第3号からの誌名は『教育研究紀要』となります。第10号の誌名によろしく『僻地教育研究』が登場し、第20号から発行者は僻地教育研究施設となります。第56号からは「僻」の字をひらがなにしています。

紀要の表紙の移り変わりは、へき研の歩みを示しています。ここでは、昭和20年代のようすを振り返ってみましょう。

昭和24年6月に北海道学芸大学が誕生したとき、「教育研究所本部」もできました。機関誌『教育開拓』は、教育研究所の構想や在り方を掲載しています。事業の一つには「大学拡張運動」があり、「僻地のスモールスクール」を対象とする「移動教室（巡回指導）」が行われました。田所学長の発案で、藤野武先生たちは「移動教室という幟をかついで」へき地の学校を訪問したそうです。

昭和27年6月には「北海道学芸大学教育研究所規則」ができ、9月に「北海道学芸大学総合教育研究所」が発足しました。第一研究部（教員養成研究）、第二研究部（教育内容・方法研究）、第三研究部（社会・児童研究）と指導部（指導助言）をもって組織し、所長は学長が兼任し、五分校に支部を置くとともに「通信教育本部」もあったそうです。その研究紀要が、先にあげた『教育研究』第1号です。総合教育研究所は気宇壮大な構想のもとに創設されますが、当時、北海道教育の課題がへき地校に凝縮していたことから、「僻地教育問題」を研究活動の内実としたのでしょう。

昭和29年3月、総合教育研究所は創設2年目にして「僻地教育研究所」と改称されます。それは、へき地教育の改善を求める教師たちの働きに呼応するものでした。すでに昭和23年には「全道単級複式教育連盟」ができ、27年7月には帯広市で「第1回全国単級複式教育研究大会」がありました。この大会は、「全国へき地教育研究連盟」の結成と「へき地教育振興決議案」を満場一致で議決しました。その熱気が、翌29年6月の「へき地教育振興法」制定につながります。本学が「僻地教育研究所」を開設するのは当然のことだったと言えます。

へき研の紀要は、平成15年に創刊50周年を迎えました。折しも14年8月に「地域教育連携・貢献推進委員会」が発足し、北海道教育委員会・札幌市教育委員会と連携を深める事業が始まり、へき研もその一端を担っています。ここに昭和20年代の記憶を想起し、「へき研」の幟をかついでスモールスクールを訪ねるなかで、北の大地に根ざす教育を構想する力を得たいと思います。

施設長 村田 文江